

文学に見る人と自然の関わり —環境の視点から見た島尾敏雄文学—

鵜戸 聡

The Human and Nature Relationship in Literature: An Ecological Reading of Toshio Shimao

UDO Satoshi

鹿児島大学法文学部

Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University

要旨

奄美の豊かな自然と、複雑な海岸線を有する島嶼環境は、人間の想像力にどのような影響を与えるのか。奄美を舞台にした文学作品を多数発表した作家の島尾敏雄を例にとり、自然に対する認知と言語化のプロセスに注目してテキストの分析を行った。その際には、狭義の文学研究の方法論に止まらずに、加計呂麻島を中心に現地調査を行うとともに、生態学や認知科学の議論を積極的に参照して新たな分析手法の開発に努めた。

研究内容

奄美に長く暮らした作家の島尾敏雄は、加計呂麻島を舞台にした一連の戦争小説をもって文学史に不滅の名を残した。海の特攻隊である震洋艇部隊の指揮官として呑之浦に赴任した彼は、戦争に追いつめられていく自分の心の動きを島の風景とともに克明に描いている点に特徴がある。

ストーリー展開に目を奪われていると「風景」という対象は読み飛ばしてしまいがちであるが、映画で心理的な効果をあげる背景音楽のように、実は知らず知らずのうちに読み手に影響を与えているものである。ただ、風景描写が必ずしも登場人物の心理状態を比喩的に表しているとは限らない。島尾作品はむしろ、島の風景と語り手の心が共鳴するようなかたちで書き進められている点に注目すべきである。

かつて「私とは私と私の環境である」とスペインの哲学者オルテガは述べたが、周りを取り巻く「環境」と切り離されてしまえば私たちは同じ自分のままでいることはできない。島尾敏雄は、この環境が人間に与える影響について執拗に描いた作家であり、アフォーダンス理論のような生態学・認知科学からのアプローチも必要であろう。

加計呂麻島の複雑に入り組んだ海岸線は、小さな島のなかに無限にも思われる屈曲を作り出して、旅人は望外の風景に行き逢うことがあるが、特攻基地が置かれた呑之浦も、震洋艇

を秘密裏に格納するのに相応しく、外からは思いもよらぬ小天地がいきなり開ける場所である(図1)。小さな島でありながら、中に踏み入ってみると存外に深い。この複雑さと深みとが、語り手の心の探索に呼応して来るのである。

戦争が語られない短篇「島へ」を読むと、島という存在そのものがいかに島尾敏雄を惹きつけ、同時に怖れさせているのかが生々しく看取される。この繊細な作家は、自分の感覚にじっくりと向き合いながら、しかし自身の知覚や判断に常に疑念を感じているように思われる。実際、文末には「～のように見える／思える」といった推量表現や「はっきりしない」「わからない」という不可知の表明が頻出し、次々に出来る事態を掴み損ねている不安を滲ませている。

加えて特徴的なのが「目」という字の多さである。「見る」という行為に敏感な語り手は、ひたすら視覚によって外界を理解しようと試みるが、しばしばその視線はさえぎられてしまう(しかも自分に向けられる視線にはほとんど恐怖を覚えている)。「錯覚」という語の多用からも、この視覚的な作家が、何かを見ることのみならず、その失敗に対して非常に関心を払っていることが窺えよう。

視線を塞いでしまうような過剰な自然に圧倒され、唯一の同行者である妻との会話もどうにも噛み合わない。島の自然の深さを語る彼女は、むしろ不安を煽ってくる(「この島はとってもせまいけど、泊にはいりこむと出られなくなるところがいっぱいあるわよ」)。己の知覚・判断への自信のなさ、既に為してしまった行為を後悔し続けることにもつながってくる。文学とは、何か知識を与えてくれるものではなく、思い込みを解きほぐして、新しい世界の姿を示してくれるものである。出来合いの思想に対する絶え間ない逡巡こそが、この作家の魅力になっていると言えるだろう。



図1 加計呂麻島・呑之浦。先の見通せない入江の中に雲がこもっている。

参考文献

- 島尾敏雄 1980-1983. 島尾敏雄全集 全17巻. 晶文社, 東京.
 島尾敏雄 1988. その夏の今は／夢の中での日常. 312頁, 講談社, 東京.